

おはなしについての反省

大塚喜一

先月號の本誌の「談話についての座談會」を興深く拜見したので、此機會に僕の今日までの經驗を省みて何か記する事もがなと思つてゐたら、丁度編輯係りの方から何か書く様にとの御手紙を頂いたので、つまらぬ自分の感想を記して御目にかける事にしやう。

思ひ起せば今より十數年の昔、只何となく幼稚園兒に接觸したい氣持になつて、自分が嘗て保育を受けた先生を慕つて母園を訪ふた。先生方に歓迎せられ、幼兒達の純眞無邪氣が感觸に此世の天國に遊ぶ心地した僕は、高等學校の休暇毎に次第に頻繁に園を訪ふやうになり遂に

「此度來なさる時は子供達へのお話を何か考へて下さるやうに」との催促を受くるに至つた。そして怒る／＼子供達の前へ立つた。最初は言葉もつかへた、語尾も不明瞭であつたらしい。しかし物珍らしさに好奇心を起してか、其後子供達が僕の姿を見ると「兄ちゃんお話！」と寄りそふて來るやうになつた。朝から遊園の一隅で、膝の上も肩からも重なり合つてお話をきいてゐる子供達にうづまつてゐる自分の姿を見出したのは其後屢々であつた。

斯くするうち、或日僕は或るお話會で『猪と七匹の羊』の實演を聴いてから、僕の「おはな

し」の態度は一變した。此お話は僕の十八番オハコになつて、同じ子供達にも幾度も繰返した。「もう一つして！ 羊！ 羊！」とアンコールされた事もあつた。僕は此お話によつて得たコツを廣く一般に應用する様に努め、更に之を話す事に依つて得た心の力を原動力として他の實演に向ふ様になつた。

もし「此世に於て君は何が一番楽しいか」と問はれたならば「それは幼児達へのお話の世界である。」と僕は答へる。數箇月の學生々活を終り樂しき希望を胸に抱いて故郷へ歸つた。其翌日、僕が園内に入るや否や子供達は八方から飛つて來てくれる。以前にも増した熱狂的歡迎其人間性の純眞赤裸々の發露に對し、僕は何を以て報ひやうかと思つた。親しい子供達と面接してゐながらまだ相互の心と心との間には薄紙一枚の隔りがある様な氣がしてならなかつた。

しかし一度「お話の世界の眞實味」を味つてからは、此障壁は完全に撤去せられた。これこそ子供達に報ひべき眞實の道である。まああの可愛いお眼まなこ々を瞬またまもさせずに、一心にお話を聞いてゐる——三百人の子供達が一人残らず！ そうした情景が今一段の佳境に入ると、最早「お話」以外に何物もなき全我沒頭の境地が體現せられる。僕は、此處に全園兒と合一する境を見出した。

誠に幼児達のお話に對する希求喝仰の念は驚くべき程である。この唱仰を満足せしめむと、拙きながら不充分ながらも話材の精選と反復せる腹案とを以て幼児達の前に立つた。しかし、斯うした幾度かのお話の中で自ら満足し得る快心の作ともいふべきは極めて僅であつた。願れば失敗の跡はまざ／＼と残つてゐた。にも拘らず、幼児達のお話に對する熱求は僕をして過ぎ

し失敗に執着せしめず之を階梯として更に斯道へ精進するの力を與へてくれた。僕が今日此の拙文を諸賢に呈して批判を乞ふを得るのも實に愛する幾多の幼兒達の賜である。記して茲に到る時、感激の涙と共に筆の止るを覺えるのである。

X X X X

次に僕の日記帳からお話の度毎に記した感想録を摘記する。日附及出所は紙面の都合上省略し、題と所とを初めに記すことにする。

五〇〇の兵隊 Y氏方にて來訪の子達十数名に。

小人數に話す事は稀であるが、可愛い、子達の謹聴振りを目のあたり見ていつもよりはずつと樂に氣安く話を進め得た、殊にC子ちゃんの熱心な聴振りにには傍聴の家族の方々も感心せられた程であった。小生も今迄の多勢にする「お話」の體驗以外に更に新しい境地がある事を暗示せられ、幼稚園のお話は家庭的團樂を本體とすべしといふ事が實感せられた。

ガリパ旅行談 堺第一幼稚園

久しぶりのお話の機を得た今日は充分お話に没頭する事に努め、従來の僕の弊たる自分の説振りや子供の聴く態度を顧慮する自意識の混入を出来るだけ少くしやうとした。

正直正月 同

話中に出て來る事件や物等につき幼兒の想像的發表盛に

出づ。

ゴム風船 同

昨日京都より歸界の模様を摺換として述べしに引續き、具體的心境を保たしむべく努力しつゝ話中に誘導した。此お話は松美主事の創作せられしもので理解容易、興味あり且有益なる三拍子揃つた作品である。僕は先日の久留島先生の講習に鑑み話の頂點のみ大なる動作を用ひ全兒の興味高調せる拍手を受けたが他はなるべく象徴的態度に止め、殊に腰の据りに留意した。

正直靴師 同

二日讀きにて爲したが、注意まとなり難く平生に比し成績思はしからざりしは遺憾、されど話の間催の時間なれども一齊に注意のまとなりたる場面もあり。今後自ら顧みて日に進み日に新にすべき境地あるを思はしむ。

まり子さん 京都城巽幼稚園

注意の集中に少しく足らなかつた憾はあつたが、鹽崎先生がよく童話の理解を敷衍し其精神を尊重して自由遊を指導せられた。次の時間の畫方にて、男兒は軍艦、女兒は人形をお話中の一場面の表現として描きどの兒も皆お話に就ての畫を描き得たので、我園への貴重ななる参考啓發の資料として頂いて歸つた。

兎の井戸、家鶏と家鴨と豚 成城幼稚園

雨天にて外遊出來ざる爲希望の兒だけ室に集めて爲す。

凡そ十五名ばかり、幼稚園のお話には極めて適當なる人數なるを今にして實感せる様に思ふ。幼兒等の話中の感應共鳴誠に面白さうであつた。其他話の後の個人的に對話し得らるゝ所等小人數獨特の境地あり。

三人の敷物 同

朝日さす室内に火鉢をかこみながら登園の兒等十名ばかり各組入混り會話を爲し居たる折、N子さん其他の兒等の要望によりお話を初む。年少兒もよく聽いてゐたが話中に出て來る動物の話等勝手々々に爲すために大きい兒は、カ、サイといふ。しかし一般は面白さうであつた。終りし時例の如くアンコールありしが他日を約し之にて止む。

この自評の中にも告白せる如く、幼稚園に於けるお話は少數の幼兒の團欒を以て本體とすべきであらう。しかしそれなるが故に大勢の幼兒を集めてのお話は出來ぬもの保育の原則に反するものとして排斥すべきではないと思ふ。話の成功失敗や其教育效果の徹底度換言すれば、如何に其お話が話者の期待する如くに幼兒達の心に受入れられて行くかは、話者の精神的準備とお話の際の心講へとに主要なる原因を有するので、人數は其次に位すべき條件であらう。お話を聽きつゝある幼兒は其一景一物を順次に自己の經驗中より再生せしめ、想像力によりて各自の世界に住み、現實にては經驗し難き情意の働きを經驗し幼兒獨特の願望欲求等の満足せられてゆくのに快哉を叫んでゐる。幼兒は話者からかゝる心的經驗をさせてもらひたさに「お話」を熱求してゐるのであるから、話者が此期待に

なしに。併しそや邪けんな聲でもなしに」

魔女「黙れこの小娘！ 今まで毎日ご馳走をやつてゐたのにちつとも肥らないじやないか、めんどろ臭いから、もう今日は食べてしまふんだ、何をくずく云ふか、早く火を焚きつけろ、くずくしてると承知しないぞ。」

「で、しほくとしてグレートル取りかゝる。なか／＼うまく焚きつかない。魔女じれつたがつて、自分で出て行つてアツく小言云ひながら、かゝんでもしつける。そこをグレートル、魔女の後より力一ぱいに押すと、ふいを打たれた魔女、一たまりもなく、竈の火の中こゝろび入る。」

グレートル「あゝよかつた。」

「と、ホットして」

グレートル「お兄さん、お兄さん。」

「と、呼びながら室の外に出て行く。間もなく、二人で話しながら入り来る。」

グレートル「ほんとによかつた。もう少しでお兄さんが食べられてしまふところでしたね。」

ヘンゼル「あゝよかつた。もうこんなところにく

づくしないで早くお家へ歸らう。」

と、二人で室を出る。

幕

(五三頁よりつゞく)

副はむが爲には「お話をする前に先づ其あらゆる情景を明に己が心眼に映せしめ、其一々の心情の動きを切實に感得せねばならぬ。此心の準備さへ充分であるならばたとひ人数は多くても又其他の副次的條件に多少缺くる所ありとも必ずや成功を収め得べく、若しこの心の準備に欠くる所があれば他の條件が如何に具備してゐても其お話の効果は極めて稀薄なるものとなり終るであらう。